

POLYACETAL-BASED RESIN COMPOSITION AND METHOD FOR PRODUCING THE SAME

Publication number: JP2002212384

Publication date: 2002-07-31

Inventor: HARASHINA HATSUHIKO

Applicant: POLYPLASTICS CO

Classification:

- international: C08J5/00; C08L59/00; C08L61/14; C08L61/14;
C08J5/00; C08L59/00; C08L61/00; C08L61/00; (IPC1-
7): C08L59/00; C08J5/00; C08L61/14

- european:

Application number: JP20010008069 20010116

Priority number(s): JP20010008069 20010116

[Report a data error here](#)

Abstract of JP2002212384

PROBLEM TO BE SOLVED: To obtain a polyacetal-based resin composition which can remarkably control the production of formaldehyde. SOLUTION. The polyacetal-based resin composition comprises (A) 100 pts.wt. of a polyacetal resin and (B) 0.001 to 100 pts.wt. of the condensate of a phenol compound with a basic nitrogen-containing compound and an aldehyde compound. The component (B) may be the condensate of phenol with an aminotriazine compound and formaldehyde. The polyacetal-based resin composition may contain an antioxidant, a heat-resistance stabilizer, a processing stability, a weather (light) stabilizer, a colorant and the like.

Data supplied from the *esp@cenet* database - Worldwide

(19)日本国特許庁 (JP)

(12)公開特許公報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開2002-212384

(P 2 0 0 2 - 2 1 2 3 8 4 A)

(43)公開日 平成14年7月31日(2002.7.31)

(51)Int.Cl.

C08L 59/00

C08J 5/00

C08L 61/14

識別記号

F I

C08L 59/00

C08J 5/00

C08L 61/14

マークコード (参考)

4F071

4J002

審査請求 未請求 請求項の数14 ○ L (全17頁)

(21)出願番号

特願2001-8069(P2001-8069)

(22)出願日

平成13年1月16日(2001.1.16)

(71)出願人 390006323

ボリプラスチックス株式会社
東京都千代田区霞が関三丁目2番5号

(72)発明者 原科 初彦

静岡県富士市宮島973番地 ボリプラスチ
ックス株式会社内

(74)代理人 100090086

弁理士 鎌田 光生

最終頁に続く

(54)【発明の名称】ポリアセタール系樹脂組成物及びその製造方法

(57)【要約】

【課題】 ホルムアルデヒドの生成を著しく抑制できる
ポリアセタール系樹脂組成物を得る。【解決手段】 ポリアセタール樹脂(A)100重量部
に対して、フェノール類と塩基性窒素含有化合物とアル
デヒド類との縮合物(B)0.001~1.00重量部程度
を添加して、ポリアセタール系樹脂組成物を調整す
る。(B)成分は、フェノールとアミノトリアジン類と
ホルムアルデヒドとの縮合物であってもよい。ポリアセ
タール系樹脂組成物は、さらに、酸化防止剤、耐熱安定
剤、加工安定剤、耐候(光)安定剤、着色剤等を含んで
いてもよい。

【特許請求の範囲】

【請求項 1】 ポリアセタール系樹脂（A）と、フェノール類と塩基性窒素含有化合物とアルデヒド類との縮合物（B）とで構成されているポリアセタール系樹脂組成物。

【請求項 2】 （B）成分において、塩基性窒素含有化合物が塩酸基性窒素含有化合物である請求項 1 記載の組成物。

【請求項 3】 （B）成分において、塩基性窒素含有化合物がトリアジン類である請求項 1 記載の組成物。

【請求項 4】 （B）成分が、塩基性樹脂及び酸性樹脂から選択された少なくとも一種の存在下で反応して得られる請求項 1 記載の組成物。

【請求項 5】 （B）成分が、塩基性触媒の存在下で反応して得られる請求項 1 記載の組成物。

【請求項 6】 （B）成分が、弱塩基性条件下で反応して得られる請求項 1 記載の組成物。

【請求項 7】 （B）成分が、ノボラック型縮合物である請求項 1 記載の組成物。

【請求項 8】 （B）成分の割合が、塩基性窒素含有化合物換算で、（A）成分 100 重量部に対して、0.0 0.1～1.00 重量部である請求項 1 記載の組成物。

【請求項 9】 さらに、酸化防止剤、耐熱安定剤、加工安定剤、耐候（光）安定剤及び着色剤から選択された少なくとも一種を含む請求項 1 記載の組成物。

【請求項 10】 ポリアセタール系樹脂（A）と、フェノールとアミノトリアジン類とホルムアルデヒドとのノボラック型縮合物（B）とで構成されている樹脂組成物であって、（B）成分の割合が、塩基性窒素含有化合物換算で、（A）成分 100 重量部に対して、0.0 1～5.0 重量部であるポリアセタール系樹脂組成物。

【請求項 11】 ポリアセタール系樹脂（A）と、フェノール類と塩基性窒素含有化合物とアルデヒド類との縮合物（B）とを混合してポリアセタール系樹脂組成物を製造する方法。

【請求項 12】 請求項 1 記載の組成物で形成された成形体。

【請求項 13】 （1）温度 80°C で 24 時間密閉空間で保存した時、発生ホルムアルデヒド量が成形体の表面積 1 cm² 当り 2 μg 以下、及び／又は（2）温度 60°C、飽和湿度の密閉空間で 3 時間保存した時、発生ホルムアルデヒド量が成形体の表面積 1 cm² 当り 3 μg 以下である請求項 12 記載の成形体。

【請求項 14】 成形体が、自動車部品、電気・電子部品、建材・配管部品、生活・化粧品用部品及び医用部品から選択された少なくとも 1 種である請求項 12 記載の成形体。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】 本発明は、ホルムアルデヒド

発生量が抑制されたポリアセタール系樹脂組成物及びその製造方法、並びにこの組成物で形成された成形体に関する。

【0002】

【従来の技術】 ポリアセタール系樹脂は、機械的性質、耐疲労性、耐摩擦・摩耗性、耐薬品性及び成形性に優れているため、自動車部品、電気・電子機器部品、その他の精密機械部品、建材・配管部材、生活・化粧品用部品、医用部品等の分野において広く利用されている。しかし

ながら、用途の拡大、多様化に伴い、その品質に対する要求はより高度化する傾向を示している。ポリアセタール系樹脂に要求される特性として、押出又是成形工程などの加工工程における機械的強度が低下しないこと、金型への付着物（モールドデボリジョン）が発生しないこと、長期加熱条件下（ヒートエージング）における機械的物性が低下しないこと、成形品のシルバーストリークやボイドなどの成形不良が生じないことが挙げられる。これらの現象の重要な因子の 1 つに加熱時のポリマーの分解が挙げられる。特に、ポリアセタール系樹脂は、その化学構造から本質的に、加熱酸化作用気下、酸性やアルカリ性条件下では容易に分解されやすい。そのため、ポリアセタール系樹脂の本質的な課題として、熱安定性を向上させて、成形加工過程又は成形品からのホルムアルデヒドの発生を抑制することが挙げられる。ホルムアルデヒドは化学的に活性であり、酸化によりゴムとなり耐熱性に悪影響を及ぼしたり、電気・電子機器の部品などに用いると、金属製接点部品が腐食したり有機化合物の付着により変色し、接点不良を生じる。さらにホルムアルデヒド自身が、部品組立工程での作業環境や最終製品の使用周辺の生活環境を汚染する。

【0003】 化学的に活性な末端を安定化するため、ホルムアルデヒドについては、重合体の末端をアセチル化などによりエスチル化する方法、コポリマーについては、重合時にトリオキサンと環状エーテル、環状ホルマールなどの環状族素結合を有するモノマーとを共重合した後、不安定な末端部分を分解除去して不活性な安定末端とする方法などが知られている。しかしながら、加熱時にはポリマーの主鎖部分での解離分解も起り、その防止には、上記処理のみでは対処できず、実用的には酸化防止剤及びその他の安定剤の添加が必須とされている。

【0004】 しかし、これらの安定剤を配合しても、ポリアセタール系樹脂の分解を完全に抑制することは困難であり、実際には組成物を調製するための押出や成形工程での溶融加工の際、押出機や成形機のシリンドー内で熱や酸素の作用を受け、主鎖の分解や充分に安定化されていない末端からホルムアルデヒドが発生し、押出成形加工時に作業環境を悪化させる。また、長時間にわたり成形を行なうと、金型に微粉状物、タール状物が付着し（モールドデボリジョン）、作業効率を低下させるとともに、成形品の表面状態を低下させる最大要因の 1 つとな

っている。さらに、ポリマー分解により機械的強度の低下、樹脂の変色が生じる。このような点から、ポリアセタール系樹脂については、より効果的な安定化処理を求めて多大な努力が続けられている。

【0005】ポリアセタール系樹脂に添加される酸化防止剤としては、立体障害を有するフェノール化合物（ヒンダードフェノール）、立体障害を有するアミン化合物（ヒンダードアミン）が知られており、その他の安定剤として、メラミン系の誘導体、ポリアミド、ポリアクリルアミド誘導体などの特定の窒素含有化合物、アミジン化合物、アルカリ金属水酸化物やアルカリ土類金属水酸化物、有機又は無機酸塩などが使用されている。また、通常、酸化防止剤は他の安定化剤と組み合わせて用いられる。しかし、このような添加剤を用いても、ポリアセタール系樹脂に対して高い安定性を付与することは困難である。

【0006】特開昭52-59646号公報には、ポリアセタールコポリマーに酸化防止剤、アルキレンウレタン類、及び尿素を添加することにより、熱及び酸化雰囲気に対する安定性を改善させ、着色を生じないポリアセタール系樹脂組成物が開示されている。しかし、酸化防止剤及び尿素の添加だけでは、未だホルムアルデヒドの発生を顕著に抑制することが困難である。

【0007】特開昭61-145245号公報には、ポリアセタールの熱安定性を改良するため、アセタールポリマーに、 α -オーレフィンと α 、 β -エチレン性不飽和カルボン酸との低分子量コポリマーのイオン性塩を少量配合した成形用組成物が開示されている。また、アミジン系安定剤として、シアノグアニジン類、トリアジン類などを用いることが記載されている。

【0008】特開昭63-260949号公報には、ポリアセタール系樹脂に、ヒンダードフェノール、ヒドロキサンカルボン酸の金属塩、溶剤、尿素含有熱安定剤（メラミン、シアノグアニジンなどのアミジン化合物）、核形成剤、耐電気止歎などを添加したポリアセタール成形用組成物が開示されている。この文献では、前記増加剤により、加熱老化中の黄変に対する耐候、機械的性質、加工適性、紫外線に対する安定性、及び静電気の蓄積に対する抵抗を向上させている。

【0009】しかし、これらの文献では、熱安定性、機械的性質、成形加工性などは改善できるものの、ホルムアルデヒドの発生を大幅に抑制することが困難であると共に、添加剤が成形品から漏み出すため、多量に添加できない。

【0010】一方、ポリアセタール系樹脂の性質を改良するために、他の材料と組み合わせることも考えられる。しかしながら、ポリアセタール系樹脂は、高結晶性であるため、他の材料との親和性や相溶性が極めて小さく、例えば、各種ポリマーの中では、フェノールノボラック樹脂との相溶性が認められている程度である（高分

子論文集, Vol. 48, No. 7, pp. 443-447 (Jul., 1991)）。特開平5-98039号公報には、ポリオキシメチレン重合体とノボラック型フェノール樹脂とからなる2軸延伸ボリオキシメチレンフィルム組成物が開示されている。しかし、この組成物においても、延伸安定性は向上しているものの、ホルムアルデヒドの発生は抑制されていない。

【0011】

【発明が解決しようとする課題】従つて、本発明の目的は、ホルムアルデヒドの生成を著しく抑制できるポリアセタール系樹脂組成物及びその製造方法、並びに成形体を提供することにある。

【0012】本発明の他の目的は、ポリアセタール系樹脂の熱安定性、特に成形加工時の溶融安定性を改善できる樹脂組成物及びその製造方法、並びに成形体を提供することにある。

【0013】本発明のさらに他の目的は、過酷な条件であってもホルムアルデヒドの生成を抑制して、成型への分解物などの付着、成形体からの分解物の浸出や成形体の熱劣化を抑制できるとともに成形品の品質を向上し、成形性を改善できるポリアセタール系樹脂組成物及びその製造方法、並びに成形体を提供することにある。

【0014】

【課題を解決するための手段】本発明者らは、前記課題を達成するため観察検討した結果、塩基性窒素含有化合物で変性したフェノール樹脂と組み合わせると、熱安定性、特に成形加工時の溶融安定性を改善できると共に、ポリアセタール系樹脂からのホルムアルデヒド発生を抑制できることを見出した。本発明を完成した。

【0015】すなわち、本発明のポリアセタール系樹脂組成物は、ポリアセタール系樹脂（A）と、フェノール類と塩基性窒素含有化合物とアルデヒド類との複合物（B）とで構成されている。（B）成分において、塩基性窒素含有化合物としては、塩状塩基性塗料含有化合物（例えば、トリアジン類）、例えば、アミノトリアジン類が例示できる。（B）成分は、塩基性触媒や酸性触媒（特にアミン類などの塩基性触媒）の存在下で反応して得てもよい。（B）成分の割合は、（A）成分100重量部に対して、0.001～1.00重量部、好ましくは0.01～5.00重量部程度である。前記樹脂組成物には、さらに、酸化防止剤、耐熱安定剤、加工安定剤、耐候（光）安定剤、着色剤等を含んでいてもよい。

【0016】本発明には、前記（A）成分と（B）成分とを混合してポリアセタール系樹脂組成物を製造する方法も含まれる。また、本発明には前記組成物で形成された成形体も含まれる。

【0017】

【明実施の形態】【（A）ポリアセタール系樹脂】ポリアセタール系樹脂とは、オキシメチレン基（-CH₂O-）を主たる構成単位とする高分子化合物であり、

ポリアセタールホモボリマー又はポリオキシメチレン(例えば、米国デュポン社製、商品名「デルリン」、旭化成工業(株)製、商品名「テナック4010」など)、オキシメチレン単位とコモノマー単位とを含有するポリアセタールコポリマー(例えば、ボリプラスチックス(株)製、商品名「ジュラコン」など)が含まれる。コポリマーにおいて、コモノマー単位には、炭素数2~6程度(好ましくは炭素数2~4程度)のオキシアルキレン単位(例えば、オキシエチレン基(-CH₂CH₂O-)、オキシプロピレン基、オキシテトラメチレン基など)が含まれる。コモノマー単位の含有量は、少量、例えば、ボリアセタール系樹脂全体に対して、0.01~20モル%、好ましくは0.03~10モル%(例えば、0.05~5モル%)、さらに好ましくは0.1~5モル%程度の範囲から選択できる。

【0018】ボリアセタールコポリマーは、二成分で構成されたコポリマー、三成分で構成されたターボリマーなどであってもよい。ボリアセタールコポリマーは、ランダムコポリマーの他、ブロックコポリマー(例えば、特公平2-24307号公報、旭化成工業(株)製、商品名「テナックLA」、「テナックLM」など)、グラフトコポリマーなどであってもよい。また、ボリアセタール系樹脂は、線状のみならず分岐構造であってもよく、架橋構造を有しててもよい。さらに、ボリアセタール系樹脂の末端は、例えば、酚酸、プロピオビン酸などのカルボン酸又はそれらの無水物とのニスチル化、イソシアネート化合物とのクレーン化、エーテル化などにより安定化してもよい。ボリアセタール系樹脂の重合度、分岐度や架橋度は特に制限なく、溶融成形可能であればよい。ボアヤタール系樹脂の分子量は特に制限されず、例えば、重量平均分子量5,000~500,000、0.00、好ましくは10,000~40,000程度である。

【0019】前記ボリアセタール系樹脂は、例えば、アルデヒド類(例えば、ホルムアルデヒド、パラホルムアルデヒド、アセトアルデヒド等)や、環状エーテル(例えば、トリオキサン、エチレンオキサイド、プロピレンオキサイド、ブチレノンオキサイド、ステレンオキサイド、シクロヘキセンオキサイド、1,3-ジオキソラン等)、環状ホルマール(例えば、ジエチレンジコールホルマール、1,4-ブタンジオールホルマール等)などを重合することにより製造できる。さらには、共重合成分として、アルキル又はアリールグリジルエーテル(例えば、メチルグリジルエーテル、エチルグリジルエーテル、フェニルグリジルエーテル、ナフチルグリジルエーテルなど)、アルキレン又はポリオキシアルキレンジリコールジグリジルエーテル(例えば、エチレンジコールジグリジルエーテル、トリエチレンジコールジグリジルエーテル、ブタンジオールジグリジルエーテルなど)、アルキル又はアリールグリジルアルコール、環状エステル(例えば、β-プロピオ

ラクトンなど)及びビニル化合物(例えば、ステレン、ビニルエーテルなど)を使用することもできる。

【0020】L(B)フェノール類と塩基性窒素含有化合物とアルデヒド類との結合物】フェノール類としては、水酸基を有する芳香族化合物である限り、特に限定されず、低分子量物でも、あるいは高分子量物でもよい。例えば、フェノール、C₁~₁₂アルキル基(好ましくはC₁~₄アルキル基)が置換したフェノール(例えば、p-、m-クレゾールなどのクレゾール類、3-,5-キシレノールなどのクレゾール類、エチルフェノール、ブロビルフェノール、ブチルフェノール、t-ブチルフェノール、オクチルフェノール、ノニルフェノール、ドデシルフェノール等)、シアノフェノール、アリールフェノール(例えば、フェニルフェノール、ベンジルフェノール、クミルフェノール等)、ビフェノール類(例えば、ビフェノールなど)、ビスフェノール類(例えば、ビスフェノールA、ビスフェノールF、ビスフェノールS等)、多価フェノール類(例えば、レゾルシン、カテコール等)、アミノフェノール類(例えば、アミノフェノールなど)、ナフトール類(例えば、α-ナフトール、β-ナフトール等)、ノボラック樹脂類(例えば、フェノールノボラック樹脂、クレゾールノボラック樹脂、フェノールフェニレンアラルキル樹脂、フェノールビフェニルアラルキル樹脂、フェノールジフェニルエーテラルキル樹脂、ナフトールフェニレンアラルキル樹脂等)等が例示できる。また、フェノール類には、フェノール性水酸基にアルキレンオキシド(例えば、エチレンオキシド、プロピレンオキシド等)が付加した変性フェノール類も含まれる。これらのフェノール類のうち、フェノール又はアルキル(C₁~₄アルキル)フェノール類、特にフェノールが好ましい。これらのフェノール類は、単独では二種以上組み合わせて使用できる。

【0021】塩基性窒素含有化合物としては、トリアジン類、アミン類、アミノ酸類、尿素類、イミダゾロン類、アミジン誘導体、ビロール類、ビリミジン類、ヒドラジン類、ピラゾール類、トリアゾール類、アミド系化合物、ウレタン系化合物、イミド系化合物等が例示できる。これらの塩基性窒素含有化合物のうち、環状塩基性窒素含有化合物、特にトリアジン類【アミノトリアジン類や(イソ)シアヌール酸又はその誘導体等】が好ましい。

【0022】アミノトリアジン類としては、通常、アミノ基を有する1,3,5-トリアジン類が使用され、例えば、メラミン類【メラミン、置換メラミン(2-メチルメラミンなどのC₁~₄アルキルメラミン、グアニルメラミン等)】、メラミン結合物(メラム、メレム、メロン等)、グアナミン類【グアナミン；メチルグアナミンなどのC₁~₄アルキルグアナミン；アセトグアナミンなどのアシルグアナミン；ベンゾグアナミン、フェニルアセトグアナミン等の芳香族グアナミ

ン；シクロヘキサンジアミンなどの脂環式グアニアミン；サクシノジグアニアミン、アジボジグアニアミン等の脂肪族グアニアミン；CTUグアニアミン（2、4、8、10-テトラオキサスピロ（5、5）ウニデンカ-3、9-ビス（2-エチルグアニアミン）；アクリログアニアミン等）が含まれる。アミノトリアジン類は、メチロール体（モノメチロールメラミン、ジメチロールメラミン、トリメチロールメラミン、テトラメチロールメラミン、ペントメチロールメラミン、ヘキサメチロールメラミン、ジメチロールベンゾグアニアミン、又はこれらの組合物など）、アルコキシメチル体（メチル化メチロールメラミン、エチル化メチロールメラミン、ブチル化メチロールメラミンなど）等の諸説体であってもよい。

【0023】(イ) シアヌール酸又はその誘導体としては、シアヌール酸；メチルシアヌアレート、エチルシアヌアレート等のC₁-アルキルシアヌアレート；アセチルシアヌアレートなどのアシルシアヌアレート；塩化シアヌール；インシアヌール酸；メチルイソシアヌアレート、エチルイソシアヌアレート等のC₁-アルキルイソシアヌアレート；アリルイソシアヌアレート；2-ヒドロキシエチルイソシアヌアレート；2-カルボキシカルボキシルイソシアヌアレート；塩素化イソシアヌール酸等が例示できる。

【0024】塩基性窒素含有化合物は、アミノ基を有するのが好ましく、アミノトリアジン類が特に好ましい。前記アミノトリアジン類のうち、通常、メラミン類、グアナミン類（グアニアミン、アセトグアニアミン、ベンゾグアニアミン等）等が使用され、メラミンが特に好ましい。アミノトリアジン類を共結合成分とする、容易に共結合物を得ることができると共に、ポリアセトアルキル系樹脂からのホルムアルデヒドの発生を著しく抑制できる。

【0025】フェノール類と塩基性窒素含有化合物との割合（モル比）は、前者／後者は1／0、0.1～1／7、好ましくは1／0、0.4～1／3、さらに好ましくは1／0、1～1／1程度である。

【0026】アルデヒド類としては、脂肪族アルデヒド（ホルムアルデヒド、アセトアルデヒド、ブロピオンアルデヒド等）、芳香族アルデヒド（ベンズアルデヒド、ヒドロキシベンズアルデヒド、フェニルアセトアルデヒド等）、ホルムアルデヒド結合体（トリフォキサン、パラホルムアルデヒド等）等が例示できる。これらのアルデヒド類のうち、脂肪族アルデヒド、特にホルムアルデヒドが好ましい。これらのアルデヒド類は、単独では二種以上組み合わせて使用できる。

【0027】(B) 成分は、前記フェノール類と前記塩基性窒素含有化合物と前記アルデヒド類との反応から得られる。(B) 成分は、塩基性窒素含有化合物で変性されたフェノール樹脂（以下、変性フェノール樹脂と称することもある）であり、レゾール型であっても、ノボラック型であってもよいが、(A) 成分との相溶性的観点から、ノボラック型が好ましい。ノボラック型の変性フ

エノール樹脂としては、例えば、フェノール性水酸基に対してメチレン結合の位置がランダムなラングムフェノールノボラック型樹脂、フェノール性水酸基に対してオルソ位でのメチレン結合が多いハイオルソノボラック型樹脂（例えば、オルソ／パラ比が1以上の樹脂）等が例示できる。これらのノボラック型変性フェノール樹脂のうち、残留フェノール類が低減されたモノマーレス樹脂やダイマー・レス樹脂が好ましい。また、(B) 成分は、未反応ホルムアルデヒドやメチロール基を実質的に含まないのが好ましい。

【0028】フェノール類と塩基性窒素含有化合物とアルデヒド類との縮合反応は、通常、塩基性塗膜及び酸性塗膜から選択された少なくとも一種の存在下に非存在下で行われる。塩基性塗膜としては、アミン類（メチルアミン、ニチルアミン、エタノールアミン、プロパンノルアミン等）の脂肪族第1級アミン；ジメチルアミン、ジエチルアミン、ジエタノールアミン等の脂肪族第2級アミン；トリメチルアミン、トリエチルアミン、トリエタノールアミン等の脂肪族第3級アミン；ヘキサメチレンテトラミン等、金属水酸化物（水酸化ナトリウム、水酸化カリウム、水酸化バリウム等のアルカリ又はアルカリ土類金属の水酸化物など）、金属酸化物（酸化ナトリウム、酸化カリウム、酸化バリウム等のアルカリ又はアルカリ土類金属の酸化物など）、炭酸金剛石（炭酸ナトリウム、炭酸カリウム等の炭酸アルカリ金属塩など）、アンモニア（水）等が例示できる。酸性塗膜としては、無機酸（塩酸、硫酸、スルホン酸、リン酸等）や有機酸（ギ酸、酢酸等の脂肪族カルボン酸；シウ酸、マロン酸、コハク酸等の脂肪族ジカルボン酸；ナフテン酸など）の環状カルボン酸；p-トルエンスルホン酸、メタンスルホン酸等の有機スルホン酸等）、ルイス酸、2-亜金剛石（順配錯鉛など）等が例示できる。これらの触媒のうち、アミン類（例えば、トリエチルアミン）、アンモニア（水）、脂肪族ジカルボン酸（例えば、シウ酸）等、特にアミン類、アンモニア（水）が好ましい。

【0029】塩基性窒素含有化合物として、ノボラック型変性フェノール樹脂を製造する場合は、塩基性（弱塩基性）又は酸性条件下、特に弱塩基性条件下（例えば、pH 7～10程度）で反応させるのが好ましい。

【0030】フェノール類及び塩基性窒素含有化合物の総量と、アルデヒド類との割合（モル比）は、前者／後者=1／0、2～1／1、2、好ましくは1／0、4～1／1、好ましくは1／0、4～1／0、9程度である。

【0031】(B) 成分の数平均分子量は、特に制限されず、例えば、300～50000、好ましくは300～10000、さらに好ましくは300～8000程度の範囲から選択できる。また、(B) 成分には、フェノール性水酸基がグリシジルエーテル化された変性体、あるいはアルキレンオキド（例えば、エチレンオキシ

ド、プロピレンオキシド等)が付加した(ボリ)アルキレンオキシド付加体も含まれる。

【0032】これらの(B)成分の譜型には、特開平8-253557号公報、特開平10-279657号公報、特開2000-351822号公報、DIC Technical Review No.3/1997, 47頁等を参照できる。また、

(B)成分は、商品名「フェノライト」〔例えば、フェノライト7050シリーズ〔KA-7051, KA-7052, KA-7052-L, KA-7054, KA-7055-L等〕、フェノライト7750シリーズ〔KA-A-7751, KA-7752, KA-7754, KA-7755等〕等〕【大日本インキ化学工業(株)製】として入手できる。(B)成分は、単独では又は二種以上組み合わせて使用できる。

【0033】(B)成分の割合は、(A)成分100重量部に対して、0.01~30重量部、好ましくは0.05~200重量部、さらに好ましくは0.1~100重量部(特に0.1~50重量部)程度である。

(B)成分の割合は、塩基性室素含有化合物換算で、(A)成分100重量部に対して、0.001~100重量部、好ましくは0.01~50重量部、さらに好ましくは0.05~30重量部程度である。

【0034】【系添加剤】本発明の樹脂組成物には、酸化防止剤、耐熱安定剤、加工安定剤、耐候(光)安定剤、着色剤等の添加剂を含むものでよい。これらの添加剂は、単独では又は二種以上組み合わせて使用できる。

【0035】(酸化防止剤)酸化防止剤には、例えば、フェノール系、アミン系、リン系、イオウ系、ヒドロキノン系、ビノリノ系酸化防止剤等が含まれる。

【0036】フェノール系酸化防止剤としては、ヒンダードフェノール類、例えば、2, 2'-メチレンビス〔4-アメチル-5-t-ブチルフェノール〕、4, 4'-メチレンビス〔2, 6-ジ-t-ブチルフェノール〕、2, 6-ジ-t-ブチル-p-クレゾール、1, 3, 5-トリメチル-2, 4, 6-トリス〔3, 5-ジ-t-ブチル-4-ヒドロキシベンジル〕ベンゼン、1, 6-ヘキサンジオールビス〔3-(3, 5-ジ-t-ブチル-4-ヒドロキシフェニル)プロピオネート〕、ベンタエリスリトールテトラキス〔3-(3, 5-ジ-t-ブチル-4-ヒドロキシフェニル)プロピオネート〕、トリエチレングリコールビス〔3-(3-t-ブチル-5-メチル-4-ヒドロキシフェニル)プロピオネート〕、n-オクタデシル-3-(4', 5'-ジ-t-ブチルフェニル)プロピオネート、ステアリル-2-(3, 5-ジ-t-ブチル-4-ヒドロキシフェニル)プロピオネート、2-t-ブチル-6-(3-t-ブチル-5-メチル-2-t-ブチル-4-ヒドロキシベンジル)-4-メチルフェニルアクリレート、4, 4'-チオビス〔3-メチル-6-t-ブチルフェノール〕等が挙げられる。

【0037】アミン系酸化防止剤としては、ヒンダード

アミン類、例えば、4-メテキシ-2, 2, 6, 6-テトラメチルビペリジン、4-ベンゾイルオキシ-2, 2, 6, 6-テトラメチルビペリジン、ビス-(2, 2, 6, 6-テトラメチル-4-ビペリジル)オギサレート、ビス-(2, 2, 6, 6-テトラメチル-4-ビペリジル)アジベート、ビス-(2, 2, 6, 6-テトラメチル-4-ビペリジル)テレフタレート、1, 2-ビス〔2, 2, 6, 6-テトラメチル-4-ビペリジルオキシ〕エタン、フェニル-1-ナフチルアミン、フェニル-2-ナフチルアミン、N, N'-ジフェニル-1, 4-フェニレンジアミン、N-フェニル-N'-シクロヘキシル-1, 4-フェニレンジアミン等が挙げられる。

【0038】リン系酸化防止剤として、例えば、トリイソデシルホスファイト、トリフェニルホスファイト、ジフェニルイソデシルホスファイト、2, 2-メチレンビス〔4, 6-ジ-t-ブチルフェニル〕オクチルホスファイト、トリス〔2, 4-ジ-t-ブチルフェニル〕ホスファイト、トリス〔2-t-ブチルフェニル〕ホスファイト、トリス〔2-t-ブチルフェニル〕ビス〔2-(1, 1-ジメチルブロブロ)フェニル〕ホスファイト、トリス〔2-t-ブチル-4-フェニルフェニル〕ホスファイト等が挙げられる。

【0039】ヒドロキノン系酸化防止剤としては、例えば、2, 5-ジ-t-ブチルヒドロキノンなどが挙げられ、キノリン系酸化防止剤としては、例えば、6-エトキシ-2, 2, 4-トリメチル-1, 2-ジヒドロキノリンなどが挙げられ、イオウ系酸化防止剤としては、例えば、ジラウリルチオジプロピオネートなどが挙げられる。

【0040】これらの酸化防止剤は、単独では又は二種以上組み合わせて使用できる。これらの酸化防止剤のうち、ヒンダードフェノール類及びヒンダードアミン類から選択された少なくとも一種、特にヒンダードフェノール類〔例えば、C₁₁-11アルキレンジオールビス〔(ジ分歧C₁₁-11アルキルヒドロキシフェニル)プロピオネート〕、又はトロキシC₁₁-11アルキレンジオールビス〔(ジ分歧C₁₁-11アルキルヒドロキシフェニル)プロピオネート〕、C₁₁-11アルキレントオリオールビス〔(ジ分歧C₁₁-11アルキルヒドロキシフェニル)プロピオネート〕、C₁₁-11アルキレントオリオールビス〕が好ましい。

【0041】酸化防止剤の割合は、ポリアセタール系樹脂100重量部に対して、0.01~5重量部、好ましくは0.05~2.5重量部、さらに好ましくは0.1~1重量部程度の範囲から選択できる。

【0042】(耐熱安定剤)耐熱安定剤には、(a)塩基性室素含有化合物、(b)有機カルボン酸金属塩、(c)アルカリ又はアルカリ土類金属化合物、(d)ハ

イドロタルサイト、(e) ゼオライト等が含まれる。

【0043】(a) 基性窒素含有化合物
基性窒素含有化合物には、低分子化合物や高分子化合物(室素含有樹脂)が含まれる。

【0044】低分子化合物としては、例えば、脂肪族アミン類(モノエタノールアミン、ジエタノールアミン等)、芳香族アミン類(オートルイジン、p-トルイジン、p-フェニレンジアミン等の芳香族第2級アミン又は第3級アミン)、アミド化合物(マロンアミド、イソフタル酸ジアミド等の多価カルボン酸アミド、p-アミノベンズアミド等)、ヒドラジン又はその誘導体(ヒドラジン、ヒドロゾン、多価カルボン酸ヒドラジドなどのヒドラジドなど)、アミノトリアジン類(グアナミン、アセトグアナミン、ベンゾグアナミン、サクシノグアナミン、アジボグアナミン、フタログアナミン、CTU-グアナミン等のグアナミン類又はそれらの誘導体、メラミン又はその誘導体(メラミン:メラム、メレム、メロン等のメラミン結合物など)、ウラシル又はその誘導体(ラシン、ウリジン等)、シトシン又はその誘導体(シトシン、シチジン等)、ガニジン又はその誘導体(グアニジン、シアノグアニジン等の環状グアニジン; クレアチニンなどの環状グアニジンなど)、尿素又はその誘導体[ビウレット、ビウレア、エチレン尿素、アセチレン尿素、イソブチリデンジウレア、クロトリデンジウレア、尿素とホルムアルデヒドとの縮合体、ヒダントイン、置換ヒダントイン誘導体(1-メチルヒダントイン、5-プロピルヒダントイン、5、5-ジメチルヒダントインなどのモノ又はジC₁-アルキル置換体; 5-フェニルヒダントイン、5、5-ジフェニルヒダントインなどのアリール置換体; 5-メチル-5-フェニルヒダントインなどのアルキルアリール置換体など)、アラントイン、置換アラントイン誘導体(例えば、ゼノ、ジまたはトリC₁-, アルキル置換体、アリール置換体など)、アラントインの金属塩(アラントインヒドロキシアルミニウムなどの原鉱表3B金属との塩など)、アラントインとアルデヒド化合物との反応生成物(アラントインホルムアルデヒド付加体など)、アラントインとイミダゾール化合物との化合物(アラントインジスルホンビロリドンカルボキシレートなど)、有機酸塩など]などが例示できる。

【0045】尿素含有樹脂としては、例えば、ホルムアルデヒドとの反応により生成するアミノ樹脂(グアナミン樹脂、メラミン樹脂、グアニジン樹脂等の縮合樹脂; ベンゾグアナミン-メラミン樹脂、芳香族ポリアミン-メラミン樹脂等の共縮合樹脂など)、芳香族アミン-ホルムアルデヒド樹脂(アニリン樹脂など)、ポリアミド樹脂[例えば、ナイロン3(パリβ-アラニン)、ナイロン4-6、ナイロン6、ナイロン6-6、ナイロン1-1、ナイロン1-2、ナイロンMXD6、ナイロン6-1-0、ナイロン6-1-1、ナイロン6-1-2、ナイロン6-6

6-610等の単独又は共重合ポリアミド; メチロール基やアルコキシメチル基を有する置換ポリアミド等]、ポリエステルアミド、ポリアミドイミド、ポリウレタン、ポリアクリルアミド、ポリ(Ν-ビニルカルボン酸アミド)、N-ビニルカルボン酸アミドと他のビニルモノマーとの共重合体などが例示できる。

【0046】これらの基性窒素含有化合物は、単独又は二種以上組み合わせて使用できる。これらの基性窒素含有化合物のうち、グアナミン類(ジボグアナミン、CTU-グアナミン等)、メラミン又はその誘導体[特にメラミン又はメラミン結合物(メラム、メレム等)、グアニジン誘導体(シアノグアニジン、クレアチニン等)、尿素誘導体[ビウレア、尿素とホルムアルデヒドとの縮合体、アラントイン、アラントインの金属塩(アラントインヒドロキシアルミニウムなど)]、尿素含有樹脂[アミノ樹脂(メラミン樹脂、メラミン-ホルムアルデヒド樹脂などのアミノ樹脂; 架橋メラミン樹脂などの架橋アミノ樹脂など)、ポリアミド樹脂など]が好ましい。

【0047】(b) 有機カルボン酸金属塩
有機カルボン酸金属塩としては、有機カルボン酸と金属(Na、K等のアルカリ金属; Mg、Ca等のアルカリ土類金属; Znなどの遷移金属など)との塩が挙げられる。

【0048】有機カルボン酸には、飽和又は不饱和脂肪族カルボン酸や、不饱和脂肪族カルボン酸の重合体等が含まれる。また、これらの脂肪族カルボン酸はヒドロキシ基を有していよいよ。

【0049】飽和脂肪族カルボン酸としては、飽和C₁-₁₈モノカルボン酸(酢酸、プロピオン酸、脂酸、イソ酪酸、古草酸、イソ吉草酸、ビバル酸、カブロニ酸、カブリニ酸、カブリニ酸、フウリン酸、ミリスナン酸、ベニタデシル酸、パレミチシル酸、ステアリン酸、アラキニ酸、ベヘン酸、モントン酸等)、飽和C₁-₁₈ジカルボン酸(シュウ酸、マロン酸、コハク酸、グルタル酸、アジピン酸、ビメリシ酸、コクル酸、アゼライン酸、セバシン酸、ドカデシニ酸、テトラデカニン酸、タブシア酸)、これらのオキシ酸(グリコール酸、乳酸、グリセリン酸、ヒドロキシ酸、クエン酸、1,2-ヒドロキシステアリン酸等)等が例示できる。

【0050】不饱和脂肪族カルボン酸としては、不饱和C₁-₁₈モノカルボン酸[(メタ)アクリル酸、クロトン酸、イソクロトン酸、ミリストレン酸、パルミトレイシ酸、オレイン酸、リノール酸、リノレン酸、アラキド酸、エルカ酸等]、不饱和C₁-₁₈ジカルボン酸(マレイン酸、フマル酸、デセン二酸、ドセセン二酸等)、これらのオキシ酸(プロピオール酸など)等が例示できる。

【0051】不饱和脂肪族カルボン酸の重合体として50は、重合性不饱和カルボン酸[α, β-エチレン性不飽

和カルボン酸、例えば、(メタ)アクリル酸などの重合性不飽和モノカルボン酸、重合性不飽和多価カルボン酸(イクコン酸、マレイン酸、フマル酸等)、前記多価カルボン酸の微無水物又はモノエステル(マレイン酸モノエチルなどのモノC₂、アルキルエステルなど)とオレフィン(エチレン、プロピレン等のα-C₂、オレフィンなど)との共重合体などが挙げられる。

【0052】これらの有機カルボン酸金属塩は、単独で又は二種以上組み合わせて使用できる。これらの有機カルボン酸金属塩のうち、アルカリ土類金属有機カルボン酸(酢酸カルシウム、クエン酸カルシウム、ステアリン酸マグネシウム、1,2-ヒドロキシステアリン酸カルシウム等)、アイオノマー樹脂(前記重合性不飽和多価カルボン酸とオレフィンとの共重合体に含有されるカルボキシル基の少なくとも一部が前記金属のイオンにより中和されている樹脂)等が好ましい。前記アイオノマー樹脂は、例えば、A-CACLYN(アライド・シグナル社製)、ハイミラン(三井デュポンボリケミカル社製)、サーリン(デュポン社製)等として市販されている。

【0053】(c) アルカリ又はアルカリ土類金属化合物

アルカリ又はアルカリ土類金属化合物には、金属性化物(CaO、MgO等)、金属水素化物[Ca(OH)₂、Mg(OH)₂等]、金属無機酸(Ca(HCO₃)₂、K₂CO₃、CaCO₃、MgCO₃等)、金属水酸化物(Ca₂(OH)₂Cl₂など)、金属リン酸塩(Mg₂(B₄O₇)₂など)等が含まれる。これらの金属性化物は、単独で又は二種以上組み合わせて使用できる。これらの金属化合物のうち、金属水素化物及び金属水酸化物、特にカルボン酸金属化合物及びアルカリ土類金属水酸化物が好ましい。

【0054】(d) ハイドロタルサイト

ハイドロタルサイトとしては、特開昭60-1241号公報及び特開平9-59475号公報等に記載されているハイドロタルサイト類、例えば、下記式で表されるハイドロタルサイト化合物が使用できる。

【0055】[M²⁺_x · M³⁺_y · (OH)_z]ⁿ [A²⁻_m · mH₂O]ⁿ

「式中、M²⁺はMg²⁺、Mn²⁺、Fe²⁺、Co²⁺等の二価金属イオンを示し、M³⁺はAl³⁺、Fe³⁺、Cr³⁺等の三価金属イオンを示す。A²⁻はCO₃²⁻、OH⁻、HPO₄²⁻、SO₄²⁻等のn価(特に1価又は2価)のアニオンを示す。xは、0 < x < 0.5であり、mは、0 ≤ m < 1である。」

ハイドロタルサイトは、単独で又は二種以上組み合わせて使用できる。なお、ハイドロタルサイトは、「DHA-4A」、「DHA-4A-2」、「アルカマイザー」等として協和化学工業(株)から入手可能である。

【0056】(e) ゼオライト

ゼオライトとしては、特に制限されないが、H型以外のゼオライト、例えば、特開平7-62142号公報に記載されているゼオライト【最小単位セルがアルカリ及び/又はアルカリ土類金属の結晶性アルミニオケイ酸塩であるゼオライト(A型、X型、Y型、L型及びZSM型ゼオライト、モルデン沸石型ゼオライト;チャバザイト、モルデン沸石、ホーボーサイト等の天然ゼオライトなど)など】などが使用できる。

【0057】ゼオライトは、単独で又は二種以上組み合わせて使用できる。なお、A型ゼオライトは、「ゼオラムA-3」、「ゼオラムA-4」「ゼオラムA-5」等として、また、X型ゼオライトは、「ゼオラムF-9」、Y型ゼオライトは、「HSZ-320NAA」等として東ソー(株)から入手可能である。

【0058】耐熱安定剤は、単独で又は二種以上組み合わせて使用できる。耐熱安定剤は、前記(a)成分と、前記(b)～(e)成分から選択された少なくとも一種とを組み合わせて用いると、少量で耐熱安定性を付与することもできる。

【0059】耐熱安定剤の割合は、例えば、ボリアセタール系樹脂100重量部に対して、0.001～10重量部、好ましくは0.001～5重量部、さらに好ましくは0.01～2重量部程度の範囲から選択できる。
(a) 成分と、[(b)～(e)]成分とを組み合わせて用いる場合は、両者の割合は、(a) / [(b)～(e)] = 90/10～10/90、好ましくは70/30～30/70程度である。

【0060】(加工安定剤)加工安定剤としては、

(a) 長鎖脂肪酸又はその誘導体、(b) ポリオキシアルキレングリコール、(c) シリコーン系化合物、(d) ワックス類等が挙げられる。などから選択された少なくとも一種が挙げられる。

【0061】(a) 長鎖脂肪酸又はその誘導体

長鎖脂肪酸は、飽和脂肪酸であってもよく、不飽和脂肪酸であってもよい。また、一部の水素原子がヒドロキシ基などの置換基で置換されたものも使用できる。このような長鎖脂肪酸としては、炭素数10以上の1価又は2価の脂肪酸、例えば、炭素数10以上の1価の飽和脂肪酸[カブリノ酸、ラクタリン酸、ミリスチン酸、ベントデシル酸、バルミチン酸、ステアリン酸、アラキニ酸、ベヘニ酸、モントン酸等のC₁₈～C₂₂飽和脂肪酸(好ましくはC₁₈～C₂₂飽和脂肪酸)など]、炭素数10以上の2価の脂肪酸[オレイン酸、リノール酸、リノレン酸、アラキドン酸、エルカ酸等のC₁₈～C₂₂不飽和脂肪酸(好ましくはC₁₈～C₂₂不飽和脂肪酸)など]、炭素数10以上の2価の脂肪酸(二脂基性脂肪酸)[セパン酸、ドデカン二酸、テトラデカン二酸、タブニア酸等の2価のC₁₈～C₂₂飽和脂肪酸]、デセン二酸、ドデセン二酸などの2価のC₁₈～C₂₂不飽和脂肪酸(好ましくは2価のC₁₈～C₂₂不飽和脂

肪酸)など)が示示できる。前記脂肪酸には、1つ又は複数のヒドロキシル基を分子内に有する脂肪酸(例えば、1,2-ヒドロキシケアリン酸などのヒドロキシ酸とC₁₂脂肪酸など)も含まれる。これらの脂肪酸は、単独で又は二種以上組み合わせて使用できる。

【0062】長鎖脂肪酸の誘導体には、脂肪酸エステル及び脂肪酸アミド等が含まれる。長鎖脂肪酸エステルとしては、その構造は特に制限されず、直鎖状又は分岐状脂肪酸エステルのいずれも使用でき、長鎖脂肪酸とアルコールとのエステル(モノエステル、ジエステル、トリエステルなど)1つ又は複数のエステル結合を有するエステルなど)が挙げられる。長鎖脂肪酸エステルを構成するアルコールは、その種類特に制限されないが、多価アルコールが好みらしい。多価アルコールとしては、庚基-6が2~8程度、好ましくは2~6程度の多価アルコール又はその重合体、例えば、アルキレンジリコール(例えば、エチレンジリコール、ジエチレンジリコール、ブロビレンジリコール等のC₂~₄アルキレンジリコール(好ましくはC₂~₄アルキレンジリコール)など)などのジオール類、グリセリン、トリメチローブロブタン又はこれらの誘導体などのトリオール類、ベンタエリスリトール、ソルビタン又はこれらの誘導体などのテトラオール類、及びこれらの多価アルニール類の単独又は共重合体(例えば、ポリエチレンジリコール、ポリブロビレンジリニール等のポリオキシアルキレンジリコールの単独又は共重合体、ポリグリヤリーンなど)などが例示できる。前記ポリオキシアルキレンジリコールの平均重合度は2以上(例えば、2~500)、好ましくは2~400(例えば、2~3000)程度であり、平均重合度1.6以上(例えば、20~200程度)が好ましく、このようなポリオキシアルキレンジリコールは、庚基-6以上脂肪酸とのエステルとして好適に使用される。好ましい多価アルニールは、平均重合度が2以上とのポリオキシアルキレンジリコールである。これらの多価アルコールは、単独で又は二種以上組み合わせて使用できる。

【0063】このような脂肪酸エステルの例としては、エチレンジリコールジステアリン酸エステル、グリセリンモノステアリン酸エステル、グリセリントリバルミチン酸エステル、ポリグリセリントリステアリン酸エステル、トリメチローブロバノンモノバルミチン酸エステル、ベンタエリスリトールモノウニデン酸エステル、ソルビタンモノステアリン酸エステル、ポリアルキレンジリコール(ポリエチレンジリコール、ポリブロビレンジリコールなど)のモノラウレート、モノバルミテート、モノステアレート、ジラウレート、ジバルミテート、ジステアレート、ジベヘネート、ジモンタネット、ジオレート、ジリノレートなどが挙げられる。これらの脂肪酸エステルは、単独で又は二種以上組み合わせて使用できる。

【0064】脂肪酸アミドとしては、前記長鎖脂肪酸

(一価又は二価の長鎖脂肪酸)とアミン類(モノアミン、ジアミン、ポリアミン類など)との酸アミド(セノアミド、ビスマイドなど)が使用できる。モノアミドとしては、例えば、カプリン酸アミド、ラウリン酸アミド、ミリストン酸アミド、バルミチン酸アミド、ステアリン酸アミド、アラキシン酸アミド、ベヘン酸アミド等の飽和脂肪酸の第1級酸アミド、オレイン酸アミドなどの不飽和脂肪酸の第1級酸アミド、ステアリルステアリン酸アミド、ステアリルオレイン酸アミド等の飽和及び/

又は不飽和脂肪酸とモノアミンとの第2級酸アミドなどを例示できる。これらの脂肪酸アミドのうち、ビスマイドが好ましい。ビスマイドには、C₁₂~₁₈アルキレンジアミン(特に、C₁₂~₁₄:アルキレンジアミン)と前記脂肪酸とのビスマイドなどが含まれ、その具体例としては、エチレンジアミンジステアリン酸アミド(エチレンビスステアリルアミド)、ヘキサメチレンジアミンジステアリン酸アミド、エチレンジアミンジオレイン酸アミド、エチレンジアミンジエルカ酸アミドなどが挙げられ、さらにエチレンジアミン(ステアリノ酸アミド)20オレイン酸アミドなどのアルキレンジアミンのアミン部に異なるアルシン基が結合した構造を有するビスマイドなども使用できる。前記酸アミドにおいて、酸アミドを構成する脂防酸は飽和脂肪酸であるのが好ましい。これらの脂肪酸アミドは、単独で又は二種以上組み合わせて使用できる。

【0065】(b)ポリオキシアルキレンジリコール
ポリオキシアルキレンジリコールには、アルキレンジリコール(例えば、エチレンジリコール、ブロビレンジリコール、テトラメチレンジリコールなどのC₂~₄アルキレンジリコール)の単独重合体(好ましくはC₂~₄アルキレンジリコールなど)の単独重合体、共重合体、それらの誘導体等が含まれる。具体例としては、ポリエチレンジリコール、ポリブロビレンジリコール、ポリテトラメチレンジリコール等のポリC₂~₄オキシアルキレンジリコール(好ましくはポリC₂~₄オキシアルキレンジリコール)、ポリオキシアルキシレン-ポリオキシブロビレン共重合体(ランダム又はブロック共重合体など)、ポリオキシアルキシレン-ポリオキシブロビレン-セリルエーテル、ポリオキシアルキシレン-ポリオキシブロビレンモノブチルエ

40 40テル等が挙げられる。

【0066】これらのポリオキシアルキレンジリコールは、単独で又は二種以上組み合わせて使用できる。これらのポリオキシアルキレンジリコールのうち、オキシエチレン単位を有する重合体、例えば、ポリエチレンジリコール、ポリオキシエチレン-ポリオキシブロビレン共重合体及びそれらの誘導体等が好ましい。また、前記ポリオキシアルキレンジリコールの数平均分子量は、1×10³~1×10⁴(例えば、1×10³~5×10³)、好ましくは2×10³~1×10⁴(例えば、2×10³~5×10³)程度である。

【0067】(c)シリコーン系化合物

シリコーン系化合物には、(ボリ)オルガノシロキサンなどが含まれる。(ボリ)オルガノシロキサンとしては、ジアルキルシロキサン(例えば、ジメチルシロキサンなど)、アルキルアリールシロキサン(例えば、フェニルメチルシロキサンなど)、ジアリールシロキサン(例えば、ジフェニルシロキサンなど)等のモノオルガノシロキサン、これらの單純重合体(例えば、ボリジメチルシロキサン、ボリフェニルメチルシロキサン等)又は共重合体等が例示できる。また、(ボリ)オルガノシロキサンには、分子末端基に主鎖にエポキシ基、ヒドロキシル基、カルボキシル基、アミノ基、エーテル基等の置換基を有する変性(ボリ)オルガノシロキサン(例えば、変性シリコーン)なども含まれる。これらのシリコーン系化合物は、単独では又は二種以上組み合わせて使用できる。

【0068】(d)ワックス類
ワックス類には、ポリオレフィン系ワックスなどが含まれる。ポリオレフィン系ワックスとしては、ポリエチレンワックス、ポリブロピレンワックス等のボリC₂~オレフィン系ワックス、ユデラン共重合体ワックスなどのオレフィン共重合体ワックスが例示でき、これらの部分酸化物又は混合物等も含まれる。オレフィン共重合体には、例えば、オレフィン(エチレン、プロピレン、1-ブテン、2-ブテン、1,オクタブテン、3-メチル-1-ブテン、4-メチル-1-ブテン、2-メチル-2-ブテン、4-メチル-1-ベンゼン、1-ヘキセン、2,3-ジメチル-2-ブテン、1-ヘプテン、1-オクタエン、1-ノネン、1-デセン、1-ドデセン等のα-オレフィン等)の共重合体や、これらのオレフィンと共重合可能なモノマー、例えば、不飽和カルボン酸又はその酸無水物[無水マレイン酸、(メタ)アクリル酸等]、(メタ)アクリル酸エスチル[(メタ)アクリル酸メチル]、(メタ)アクリル酸エチル、(メタ)アクリル酸ブロビン、(メタ)アクリル酸ブチル、(メタ)アクリル酸2-エチルヘキシル等の(メタ)アクリル酸C₁~アルキル(好ましくはC₂~アルキル)エスチルなど]等の重合性モノマーとの共重合体等が挙げられる。また、これらの共重合体には、ラングム共重合体、ブロック共重合体、又はグラフト共重合体が含まれる。オレフィン共重合体ワックスは、通常、エチレンと、他のオレフィン及び重合性モノマーから選択された少なくとも一種のモノマーとの共重合体である。

【0069】これらのワックス類は、単独では又は二種以上組み合わせて使用できる。これらのワックスのうち、ポリエチレンワックスが好ましい。ワックス類の数平均分子量は、1,000~2,000、好ましくは5,000~15,000、さらに好ましくは10,000~12,000程度である。

【0070】加工安定剤は、単独では又は二種以上組み合

わせて使用できる。加工安定剤の割合は、ボリアセタール樹脂1,000重量部に対して、0.01~1.0重量部、好ましくは0.03~5重量部(例えば、0.05~3重量部)程度、特に0.05~2重量部程度である。

【0071】(耐候(光)安定剤)
耐候(光)安定剤としては、(a)ベンゾトリアゾール系化合物、(b)ベンゾフェノン系化合物、(c)芳香族ベンゾエート系化合物、(d)シアノアクリレート系化合物、(e)シケニアニド系化合物、(f)ヒンダードアミン系化合物等が挙げられる。

【0072】(a)ベンゾトリアゾール系化合物

ベンゾトリアゾール系化合物としては、2-(2'-ヒドロキシ-5'-メチルフェニル)ベンゾトリアゾール、2-(2'-ヒドロキシ-3',5'-ジエトキシ-2'-(2'-ヒドロキシ-3',5'-ジエトキシ-2-アミルフェニル)ベンゾトリアゾール、2-(2'-ヒドロキシ-3',5'-ビス(α,α-ジメチルベンジル)フェニル)ベンゾトリアゾールなどのヒドロキシル基及びアルキル(C₁~アルキル)基置換アリール基を有するベンゾトリアゾール類;2-[2'-ヒドロキシ-3',5'-ビス(α,α-ジエトキシ-2-アミルフェニル)フェニル]ベンゾトリアゾールなどのヒドロキシル基及びアルキル(又はアリール)基置換アリール基を有するベンゾトリアゾール類;2-(2'-ヒドロキシ-4'-オクトキシフェニル)ベンゾトリアゾールなどのヒドロキシル基及びアルコキシ(C₁~アルコキシ)基置換アリール基を有するベンゾトリアゾール類等が挙げられる。これらのベンゾトリアゾール化合物は、単独では又は二種以上組み合わせて使用できる。これらのベンゾトリアゾール系化合物のうち、ヒドロキシル基及びC₁~アルキル基置換C₁~アリール(特にフェニル)基を有するベンゾトリアゾール類、並びにヒドロキシル基及びC₁~アリール-C₁~アルキル(特にフェニル-C₁~アルキル)基置換アリール基を有するベンゾトリアゾール類などである。

【0073】(b)ベンゾフェノン系化合物

ベンゾフェノン系化合物としては、複数のヒドロキシル基を有するベンゾフェノン類(2,4-ジヒドロキシベンゾフェノンなどのジ乃至テトラヒドロキシベンゾフェノン等)、2-ヒドロキシ-4-オキシベンジルベンゾフェノンなどのヒドロキシ基及びヒドロキシ置換アリール又はアルキル基を有するベンゾフェノン類など);ヒドロキシル基及びアルコキシ(C₁~アルコキシ)基を有するベンゾフェノン類(2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン、2-ヒドロキシ-4-オクトキシベンゾフェノン、2-ヒドロキシ-4-ドデシルオキシベンゾフェノン、2,2'-ジヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン、2,2'-ジヒドロキシ-4,4'-ジメトキシベンゾフェノン、2-ヒドロキシ-4-メトキシ-5-スルホベンゾフェノン等)などが挙げられ

る。これらのベンゾフエノン化合物は、単独で又は二種以上組み合わせて使用できる。これらのベンゾフエノン系化合物のうち、ヒドロキシル基と共にヒドロキシル基置換C₁-, アリール（又はC₆-アリール-C₁-アルキル）基を有するベンゾフエノン類、特に、ヒドロキシル基と共にヒドロキシル基置換フェニル-C₁-アルキル基を有するベンゾフエノン類が好ましい。

【0074】(c) 芳香族ベンゾエート系化合物

芳香族ベンゾエート系化合物としては、p-t-ブチルフェニルサリシート、p-オクチルフェニルサリシートなどのアルキルアリールサリシレート類が挙げられる。芳香族ベンゾエート化合物は、単独で又は二種以上組み合わせて使用できる。

【0075】(d) シアノアクリレート系化合物

シアノアクリレート系化合物としては、2-エチルヘキシル-2-シアノ-3, 3-ジフェニルアクリレート、エチル-2-シアノ-3, 3-ジフェニルアクリレート等のシアノ基含有アリールアクリレート類などが挙げられる。シアノアクリレート系化合物は、単独で又は二種以上組み合わせて使用できる。

【0076】(e) シュウ酸アニド系化合物

シュウ酸アニド系化合物としては、N-(2-エチルフェニル)-N'-(2-エトキシ-5-t-ブチルフェニル)シュウ酸ジアミ、N-(2-エチルフェニル)-N'-(2-エトキシフェニル)シュウ酸ジアミド等の窒素原子上に置換されていてもよいアリール基などを有するシュウ酸ジアミド類が挙げられる。シュウ酸アニド化合物は、単独で又は二種以上組み合わせて使用できる。

【0077】(f) ヒンダードアミン系化合物

ヒンダードアミン系化合物としては、立体障害性基を有するビペリジン誘導体、例えば、エステル基含有ビペリジン誘導体【4-アセトキシ-2, 2, 6, 6-テトラメチルビペリジン、4-ステアロイルオキシ-2, 2, 6, 6-テトラメチルビペリジン、4-アクリロイルオキシ-2, 2, 6, 6-テトラメチルビペリジンなどの脂肪族アシルオキシビペリジン(C₁-; 脂肪族アシルオキシ-テトラメチルビペリジンなど)；4-ベンゾイルオキシ-2, 2, 6, 6-テトラメチルビペリジンなどの芳香族アシルオキシビペリジン(C₆-; 芳香族アシルオキシ-テトラメチルビペリジンなど)；ビス(2, 2, 6, 6-テトラメチル-4-ビペリジル)オギザレート、ビス(2, 2, 6, 6-テトラメチル-4-ビペリジル)マロネート、ビス(2, 2, 6, 6-テトラメチル-4-ビペリジル)アジベート、ビス(1, 2, 2, 6, 6-ベンタメチル-4-ビペリジル)セバケート、ビス(1, 2, 2, 6, 6-ベンタメチル-4-ビペリジル)セバケートなどの脂肪族ジ又是トリカルボン酸-ビス又はトリスピペリジルエステル

(C₂-; 脂肪族ジカルボン酸-ビススピペリジルエステルなど)；ビス(2, 2, 6, 6-テトラメチル-4-ビペリジル)テレフタレート、トリス(2, 2, 6, 6-テトラメチル-4-ビペリジル)ベンゼン-1, 3, 5-トリカルボキシレートなどの芳香族ジカルボン酸-ビス乃至テトラキスピペリジルエステル(芳香族ジ又はトリカルボン酸-ビス又はトリスピペリジルエステルなど)など】、エーテル基含有ビペリジン誘導体【4-メトキシ-2, 2, 6, 6-テトラメチルビペリジンなどのC₁-; アルコキスピペリジン(C₁-; アルコキスピ-テラメチルビペリジンなど)；4-シーキ-ヘキシルオキシ-2, 2, 6, 6-テトラメチルビペリジンなどのC₆-; シクロアルキルオキスピペリジン；4-フェノキシ-2, 2, 6, 6-テトラメチルビペリジンなどのアリールオキスピペリジン；4-ベンゾオキシ-2, 2, 6, 6-テトラメチルビペリジンなどC₁-; アリール-C₁-アルキルオキスピペリジンなど；1, 2-ビス(2, 2, 6, 6-テトラメチル-4-ビペリジルオキシ)エタンなどのアルキレンジオキスピビス20 ピペリジン(C₁-; アルキレンジオキスピスピペリジンなど)】、アミド基含有ビペリジン誘導体【4-《フェニルカルバモイルオキシ》-2, 2, 6, 6-テトラメチルビペリジンなどのカルバモイルオキスピペリジン；ビス(2, 2, 6, 6-テトラメチル-4-ビペリジル)ヘキサメチレン-1, 6-ジカルバメートなどのカルバモイルオキシ置換アルキレンジオキスピスピペリジンなど】などが挙げられる。また、高分子量のビペリジン誘導体重結合物(コハク酸ジメチル-1-(2-ヒドロキシエチル)-4-ヒドロキシ-2, 2, 6, 30 6-テトラメチルビペリジン重結合物など)なども含まれる。これらのヒンダードアミン系化合物は、単独で又は二種以上組み合わせて使用できる。

【0078】これらのヒンダードアミン系化合物のうち、エステル基含有ビペリジン誘導体、特に、脂肪族カルボン酸スピペリジルエステル(好ましくはC₁-; 脂肪族ジカルボン酸-ビスピペリジルエステル、さらに好ましくはC₆-; 脂肪族ジカルボン酸スピテラメチルスピペリジルエステルなど)、芳香族ジ又はトリカルボン酸-ビス又はトリスピペリジルエステル等が好ましい。

【0079】耐候(光)安定剤は、単独で又は二種以上組み合わせて使用できる。耐候(光)安定剤の割合は、ポリアセタール樹脂100重量部に対して、0.01～5重量部、好ましくは0.01～2重量部、さらに好ましくは0.1～2重量部程度である。また、耐候(光)安定剤は、(f)成分と、他の(a)～(e)成分から選択された少なくとも一種と併用するのが好ましく、特に、(a)ベンゾトリアゾール系化合物と(f)ヒンダードアミン系化合物とを併用するのが好ましい。この場合、(f)成分と[(a)～(e)]成分との割合(重量比)は、前者/後者=0/100～80/20、

好ましくは 10 / 90 ~ 70 / 30 、さらに好ましくは 20 / 80 ~ 60 / 40 程度である。

【0080】(着色剤) 着色剤としては、各種塗料又は顔料が使用できる。塗料はソルベント顔料が好ましく、アクリル系顔料、アントラキノン系顔料、フタロシアニン系顔料、又はナフトキノン系顔料などが挙げられる。顔料については、無機顔料及び有機顔料のいずれも使用できる。

【0081】無機顔料としては、チタン系顔料、亜鉛系顔料、カーボンブラック(ファーネスブラック、チャネルブラック、アセチレンブラック、ケッチャンブラック等)、鉄系顔料、モリブデン系顔料、カドミウム系顔料、鉛系顔料、コバルト系顔料、及びアルミニウム系顔料などが例示できる。

【0082】有機顔料としては、アゾ系顔料、アンヌラキノン系顔料、フタロシアニン系顔料、キナクリン系顔料、ペリレン系顔料、ペリノン系顔料、イソイソドリソ系顔料、ジオキサン系顔料、又はスレン系顔料などが例示できる。

【0083】着色剤は、単独で又は 2 種以上組み合わせて使用できる。これらの着色剤のうち、光遮蔽効果の高い着色剤「カーボンブラック、チタン白(酸化チタン)、フタロシアニン系顔料」、特にカーボンブラックを用いると、耐候(光)性を向上できる。

【0084】着色剤の割合は、例えば、ボリアセタール樹脂 100 重量部に対して、0 ~ 5 重量部(例えば、0.01 ~ 5 重量部)、好ましくは 0.1 ~ 4 重量部、さらに好ましくは 0.1 ~ 2 重量部程度である。

【0085】(他の添加剤) 本発明のボリアセタール系樹脂組成物には、必要に応じて、慣用の添加剤、例えば、耐候剤、樹脂、耐電防止剤、滑動性改良剤、耐衝撃性改良剤、難燃剤、界面活性剤、各種ポリマー(例えば、オレフィン系樹脂、ポリエステル系樹脂、ウレタン系樹脂等)、充填剤等を単独で又は 2 種以上組み合わせて添加してもよい。また、必要に応じて、耐候(光)性に優れた樹脂、例えば、アクリル系樹脂「ボリメルメタクリレートなどの C₁~C₄ アルキル(メタ)アクリレートの単独又は共重合体」、アクリル系コアセルボリマー、ボリカーボネート樹脂等を添加してもよい。

【0086】〔ボリアセタール系樹脂組成物の製造方法〕本発明のボリアセタール系樹脂組成物は、粉粒状混合物や溶融混合物であってもよく、(A)成分と、(B)成分と、必要により他の添加剤とを慣用の方法で混合することにより調製できる。例えば、(1) 各成分を混練して、一輪又は二輪の押出機により混練して押出してペレットを調製した後、成形する方法。(2) 一旦組成の異なるペレット(「マスター・ペレット」)を調製し、そのペレットを所定量混合(希釈)して成形に供し、所定の組成の成形体を得る方法等が採用できる。

【0087】本発明の樹脂組成物は、慣用の成形方法、

例えば、射出成形、押出成形、圧延成形、プロー成形、真空成形、発泡成形、回転成形、ガスインジェクションモールディングなどの方法で、種々の成形体を成形するのに有用である。

【0088】〔成形体〕前記ボリアセタール系樹脂組成物で構成された本発明のボリアセタール系樹脂成形体は、(A)成分と、(B)成分とを組み合わせて含んでおり、耐候(光)安定性に優れるとともに、ホルムアルデヒド発生量が極めて少ない。すなわち、酰化防止剤などの安定剤を含む従来のボリアセタール系樹脂で構成された成形体は、比較的多量のホルムアルデヒドを生成し、腐食や変色などの他、生活環境や作業環境を汚染する。例えば、一般に市販されているボリアセタール系樹脂成形体からのホルムアルデヒド発生量は、乾式(恒温乾燥器置換下)において、表面積 1 cm²当たり 2 ~ 5 μg 程度であり、湿式(恒温湿润器置換下)において、表面積 1 cm²当たり 3 ~ 6 μg 程度である。

【0089】これに対して、本発明のボリアセタール系樹脂成形体は、乾式において、ホルムアルデヒド発生量が成形体の表面積 1 cm²当たり 2 μg 以下(0 ~ 1.5 μg 程度)、好ましくは 0 ~ 1 μg、さらに好ましくは 0 ~ 0.8 μg 程度であり、通常 0.01 ~ 0.7 μg 程度である。また、湿式において、ホルムアルデヒド発生量が成形体の表面積 1 cm²当たり 3 μg 以下(0 ~ 2.5 μg 程度)、好ましくは 0 ~ 2 μg、さらに好ましくは 0 ~ 1.7 μg 程度であり、通常 0.01 ~ 1.5 μg 程度である。

【0090】本発明のボリアセタール系樹脂成形体は、乾式及び湿式のいずれか一方において、前記ホルムアルデヒド発生量を有していればよく、通常、乾式及び湿式の双方において、前記ホルムアルデヒド発生量を有している。

【0091】なお、乾式でのホルムアルデヒド発生量は、次のようにして測定できる。

【0092】ボリアセタール系樹脂成形体を、必要により切断して表面積を測定した後、その成形体の適當量(例えば、表面積 1.0 ~ 5.0 cm²となる程度)を密閉容器(容量 20 m³)に入れ、温度 80 °C で 24 時間放置する。その後、この密閉容器中に水を 5 m³注入し、この水浴液のホルマリン量を JIS K 1010, 2.9(ホルムアルデヒドの項)に従って定量し、成形体の表面積当たりのホルムアルデヒド発生量(μg/cm²)を求める。

【0093】また、湿式でのホルムアルデヒド発生量は、次のようにして測定できる。

【0094】ボリアセタール系樹脂成形体を、必要により切断して表面積を測定した後、その成形体の適當量(例えば、表面積 1.0 ~ 1.00 cm²となる程度)を、蒸留水 5 m³を含む密閉容器(容量 1 L)の蓋に吊下げて密閉し、恒温槽内に温度 60 °C で 3 時間放置する。

その後、室温で1時間放置し、密閉容器中の水溶液のホルマリン量をJIS K0102、2.9(ホルムアルデヒドの項)に従って定量し、成形体の表面積当たりのホルムアルデヒド発生量($\mu\text{g}/\text{cm}^2$)を求める。

【0095】本発明における前記ホルムアルデヒド発生量の数値規定は、(A)成分及び(B)成分を含む限り、慣用の基準値(通常の、酸化防止剤、安定剤、着色剤等)を含有するポリアセタール系樹脂組成物の成形体についてだけでなく、無機充填剤、他のポリマーなどを含有する組成物の成形体においても、その成形体の表面の大部(例えば、50~100%)が樹脂で構成された成形体(例えば、多色成形体や被覆成形体など)についても適用可能である。

【0096】本発明の成形体は、ホルムアルデヒドが弊害となるいずれの用途(例えは、自動車部品としてのノブ、レバーなど)にも使用可能であるが、自動車部品や電子部品(駆動部品や受動部品など)、建材・配管部品、日用品(生活)・化粧品用部品、及び医療(医療)部品として好適に使用される。

【0097】より具体的には、自動車部品としては、インナーハンドル、フェューエルランプオーバー、シートベルトバックル、アシストラップ、各種スイッチ、ノブ、レバー、クリップ、スピーカーケーブル等の内装部品、メーター・コネクターなどの電気系統部品、オーディオ機器やカーナビゲーション機器などの車載電気・電子部品、ウインドウレギュレーターのキャリアーブレードに代表される金属と接触する部品、ドアロックアクチューター部品、ミラー部品、バイモーターシステム部品、燃料系統の部品などの機械部品が例示できる。

【0098】電気・電子部品(機構部品)としては、ポリアセタール系樹脂成形体で構成され、かつ金属接点が多数存在する機器の部品又は部材【例えは、カセットテープレコーダーなどのオーディオ機器、VTR(ビデオオーディオレコーダー)、8mmビデオ、ビデオカメラなどのビデオ機器、又はコピー機、ファクシミリ、ワードプロセッサー、コンピューターなどのOA(オフィスオートメーション)機器、更にはモーター、駆動などの駆動力で作動する玩具、電話機、コンピュータなどに付属するキーボードなど】などが例示できる。具体的には、シャーシ(基盤)、ギヤー、レバー、カム、ブリーラー、軸受けなどが挙げられる。さらに、少なくとも一部がポリアセタール系樹脂成形体で構成された光及び磁気メディア部品(例えは、金属薄型磁気テープカセット、磁気ディスクカートリッジ、光磁気ディスクカートリッジなど)、更に詳しくは、音楽用メタルテープカセット、デジタルオーディオテープカセット、8mmビデオテープカセット、フロッピーディスク(登録商標)ディスクカートリッジ、ミニディスクカートリッジなどにも適用可能である。光及び磁気メディア部品の具体例としては、テープカセット部品(テープカセットの本体、リール、ヘッド、

ガイド、ローラー、ストッパー、リッドなど)、ディスクカートリッジ部品(ディスクカートリッジの本体(ケース)、シャッター、クランピングプレートなど)などが挙げられる。

【0099】さらに、本発明のポリアセタール系樹脂成形体は、照明器具、建具、配管、コック、蛇口、トイレ周辺機器部品などの建材・配管部品、文具、リップクリーム・口紅容器、洗浄器、浄水器、スプレー・ノズル、スプレー容器、エアゾール容器、一般的な容器、注射針の10ホルダーなどの広範な生活関係部品・医療関係部品に好適に使用される。

【0100】

【発明の効果】本発明のポリアセタール系樹脂組成物は、フェノール類と塩基性窒素含有化合物とアルデヒド類との複合物を含んでるので、熱安定性、特に成形加工時の前融安定性を改善できると共に、ポリアセタール系樹脂及び成形体からのホルムアルデヒドの発生量を極めて低レベルに抑制でき、周囲環境(作業環境、使用環境など)を大きく改善できる。さらには、過酷な条件下であってもホルムアルデヒドの生成を抑制でき、金型への分解物や添加物などの付着(モールドデボジット)、成形体からの樹脂分解物や添加物の浸出や成形体の熱劣化を抑制でき、成形体の品質や成形性を向上できる。

【0101】

【実施例】以下に、実施例に基づいて本発明をより詳細に説明するが、本発明はこれらの実施例により限定されるものではない。

【0102】なお、実施例及び比較例において、成形性(金型付着物の量)、乾式及び湿式での成形体からのホルムアルデヒドの発生量について、以下のようにして評価した。また、実施例及び比較例を使用したポリアセタール樹脂、変性フェノール樹脂、酸化防止剤、耐熱安定剤、加工安定剤、耐候(光)安定剤及び着色剤は以下の通りである。

【0103】【成形性(金型付着物の量)】ポリアセタール系樹脂組成物で形成されたペレットから特定形状の成形体(直径2.0mm×厚み1mm)を、射出成形機を用いて連続成形(1000ショット)し、金型付着物の程度を5段階に評価した。なお、数字が小さい程、金型付着物が少ない、すなわち、モールドデボジットが少ないことを意味する。

【0104】【乾式での成形体からのホルムアルデヒド発生量】試験片(2mm×2mm×50mm)10個(総表面積約40cm²)の樹脂サンプルを密閉容器(容量20ml)に入れ、温度80°Cで24時間、恒温槽内で加熱した後、室温に冷却し、蒸留水5mlをシリジンにて注入した。この水溶液のホルムアルデヒド量を、JIS K0102、2.9(ホルムアルデヒドの項)に従って定量し、表面積当たりのホルムアルデヒドガス発生量($\mu\text{g}/\text{cm}^2$)を算出した。

【0105】〔塗式での成形体からのホルムアルデヒド発生量〕平板状成形体(120mm×120mm×2mm)から4辺を切取して得た試験片(100mm×40mm×2mm; 縦表面積85.6cm²)を蒸留水50mlを含むポリエチレン製瓶(容量1L)の蓋に吊下げて密閉し、恒温槽内に温度60°Cで3時間放置した後、室温で1時間静置した。ポリエチレン製瓶中の水溶液のホルマリン量をJIS KC102, 29(ホルムアルデヒドの項)に従って定めし、表面積当たりのホルムアルデヒド発生量($\mu\text{g}/\text{cm}^2$)を算出した。

【0106】〔ポリアセタール樹脂A〕

A-1: ポリアセタール樹脂コボリマー(溶融加水分解法安定化樹脂、メルトイントンデックス=9g/10分)
A-2: ポリアセタール樹脂コボリマー(溶融加水分解法安定化樹脂、メルトイントンデックス=9g/10分)

なお、上記メルトイントンデックスは、ASTM-D1238に従じ、190°C、216.9gの条件下で求めた値(g/10分)である。

【0107】〔変性フェノール樹脂B〕

B-1～B-5: 下記合成例1～5により得られた変性フェノール樹脂
B-6: アミノトリアジン変性フェノール樹脂[大日本インキ化学工業(株)製、フェノライトKA-7054(塗素含有量12.2重量%, 軟化点: 32°C)]
B'-1: 下記合成例6により得られた未変性フェノール樹脂。

【0108】〔熱硬化性剤C〕

C-1: トリエチレングリニールーピス[3-(3-1-ブチル-5-メチル-4-ヒドロキシフェニル)プロピオネート]
C-2: ベンガリエシリスリートルテトラキス[3-(3,5-ジ- β -ブチル-4-ヒドロキシフェニル)プロピオネート][イルガノックス1010、チバガイギー(株)製]。

【0109】〔耐熱安定剤D〕

D-1: メラミン
D-2: メラミンホルムアルデヒド樹脂

メラミン1モルに対してホルムアルデヒド1.2モルを用い、水溶液中、pH8、温度70°Cで反応させ、反応系を白濁させることなく水溶性初期総合体のメラミンホルムアルデヒド樹脂を生成させた。次いで、搅拌しながら反応系をpH6.5に調整して、搅拌を維持し、メラミン-ホルムアルデヒド樹脂を析出させ、乾燥により粗製メラミン-ホルムアルデヒド樹脂の粉粒体を得た。この粉粒体を60°Cの水中で30分間洗浄し、過滤した後、残液をアセトンで洗浄し、これを乾燥することにより白色粉末の精製メラミン-ホルムアルデヒド樹脂を得た。

【0110】

D-3: メレム[日産化学工業(株)製]

D-4: ナイロン6-66-610

D-5: アラントイン[川研ファインケミカル(株)製]

D-6: アラントインヒドロキシアルミニウム[川研ファインケミカル(株)製、「ALDA」]

D-7: CTUグアナミン[味の素ファインテクノ(株)製]

D-8: 1,2-ヒドロキシステアリン酸カルシウム

D-9: 酸化マグネシウム

10 D-10: アイオノマー[三井・デュポンポリケミカル(株)製、ハイミラン1702]

D-11: クエン酸カルシウム

D-12: 酢酸カルシウム

D-13: ハイドロタルサイト[協和化学工業(株)製、DHA-4]

D-14: ゼオライトA-4[東ソー(株)製、ゼオラムA-4]。

【0111】〔加工安定剤E〕

E-1: エチレングリコールアリルアミド

20 E-2: グリセリンモノステアレート
E-3: ポリエチレングリコールモノステアリン酸エステル(日本油脂(株)製、ノミオンS-400)

E-4: エチレングリコールジステアレート。

【0112】〔耐候(光)安定剤F〕

F-1: 2-(2'-ヒドロキシ-3', 5'-ジ- β -アミルフェニル)ベンゾトリアゾール

F-2: 2-ヒドロキシ-4-オキシベンジルベンゾフエノン

F-3: 2-[2'-ヒドロキシ-3', 5'-ビス(α, α-ジメチルベンジル)フェニル]ベンゾトリアゾール

F-4: ビス(2, 2, 6, 6-テトラメチル-4-ヒペリジル)セバケート。

【0113】〔着色剤G〕

G-1: カーボンブラック(アセチレンブラック)

G-2: フタロシアニン青色顔料

G-3: 酸化チタン。

【0114】合成例1〔変性フェノール樹脂(B-1)の合成〕

40 フェノール100重量部及びメラミン10重量部に、4.2重量%ホルムアルデヒド水溶液5.4重量部及びトリエチルアミン0.5重量部を添加し、100°Cまで徐々に昇温した。さらに、100°Cで2時間反応を行った後、常圧下水を除去しながら180°Cまで2時間かけて昇温し、次に未反応のフェノールを減圧除去して変性フェノール樹脂(軟化点105°C)を得た。

【0115】合成例2〔変性フェノール樹脂(B-2)の合成〕

フェノール100重量部に、4.2重量%ホルムアルデヒド水溶液3.1重量部及びトリエチルアミン0.5重量部

を添加し、80°Cまで昇温した。これにメラミン20重量部を加えて1時間反応させ、常圧下で水を除去しながら120°Cまで昇温し、さらに2時間反応を行った。次いで、常圧下で水を除去しながら180°Cまで2時間かけて昇温し、次に未反応のフェノールを減圧除去して変性フェノール樹脂（軟化点135°C）を得た。

【0116】合成例3 [変性フェノール樹脂（B-3）の合成]

フェノール100重量部に、42重量%ホルムアルデヒド水溶液38重量部及びトリエチアルアミン0.5重量部を添加し、80°Cで3時間反応させた。これにメラミン15重量部及びベンゾグアニミン15重量部を加えて2時間反応させ、常圧下で水を除去しながら120°Cまで昇温し、さらに2時間反応を行った。次いで、常圧下で水を除去しながら180°Cまで2時間かけて昇温し、次に未反応のフェノールを減圧除去して変性フェノール樹脂（軟化点129°C）を得た。

【0117】合成例4 [変性フェノール樹脂（B-4）の合成]

フェノール100重量部及びベンゾグアニミン10重量部に、42重量%ホルムアルデヒド水溶液55重量部及びシウ酸0.5重量部を添加し、100°Cまで徐々に昇温した。さらに、100°Cで5時間反応を行った後、常圧下で水を除去しながら180°Cまで2時間かけて昇温し、次に未反応のフェノールを減圧除去して変性フェノール樹脂（軟化点105°C）を得た。

【0118】合成例5 [変性フェノール樹脂（B-5）の合成]

フェノールフニニレンアラカルキル樹脂（特開2000-351822号公報の実施例4に準拠して調製した2核体及び3核体の混合物）100重量部及びメラミン41

重量部に、42重量%ホルムアルデヒド水溶液13重量部及び25重量%アンモニア水溶液0.3重量部を添加し、100°Cまで徐々に昇温した。さらに、100°Cで5時間反応を行った後、常圧下で水を除去しながら180°Cまで2時間かけて昇温し、次に未反応のフェノールを減圧除去して変性フェノール樹脂（軟化点93°C）を得た。

【0119】合成例6 [比較例に用いた未変性フェノール樹脂（B'-1）の合成]

フェノール100重量部に、42重量%ホルムアルデヒド水溶液65重量部及び35重量%濃塩酸0.1重量部を添加し、85°Cまで徐々に昇温した。さらに、85°Cで1時間反応を行った後、常圧下で水を除去しながら175°Cまで2時間かけて昇温し、次に未反応のフェノールを減圧除去して未変性フェノール樹脂を得た。

【0120】実施例1～15及び比較例1～5

ポリアセタール系樹脂A100重量部に、変性フェノール樹脂B、酸化防止剤C、耐熱安定剤D、加工安定剤E、耐候（光）安定剤F、着色剤Gを表1に示す割合で配合した後、2軸押出機により溶融混合し、ペレット状の粗成形物を調製した。このペレットを用いて、射出成形機により、所定の試験片を成形し、成形時のモールドデボリットを評価した。また、所定の試験片からのホルムアルデヒド発生量を測定した。結果を表1に示す。

【0121】なお、比較のため、変性フェノール樹脂を添加しない例、変性フェノール樹脂の代わりに未変性フェノール樹脂を添加した例について、上記と同様にして評価した。結果を表2に示す。

【0122】

【表1】

表1 実験結果

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
*アリナ-4溶液 A [重量比]	A-1	A-1	A-1	A-1	A-1	A-1	A-1	A-2	A-1						
溶性アリナ-4溶液 B [重量比]	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
溶性アリナ-4溶液 C [重量比]	B-1	B-2	B-3	B-4	B-5	B-1	B-2	B-3	B-4	B-5	B-2	B-6	B-6	B-6	B-6
溶性アリナ-4溶液 D [重量比]	50	0.5	5.0	1.0	1.0	0.5	0.3	0.5	0.5	0.5	0.2	0.5	0.5	0.5	0.5
溶性アリナ-4溶液 E [重量比]	C-1	C-2	C-1	C-1	C-1	C-1	C-1	C-1	C-1	C-1	C-1	C-1	C-1	C-1	C-1
溶性アリナ-4溶液 F [重量比]	D-1	D-2	-	D-3	D-1	D-1	D-2	D-4	D-4	D-5	D-6	D-5	D-6	D-7	D-7
溶性アリナ-4溶液 G [重量比]	D-8	D-9	-	D-8	D-9	D-8	D-10	D-11	D-12	D-13	D-14	D-8	D-8	D-8	D-8
溶性アリナ-4溶液 H [重量比]	E-1	E-2	E-1	E-3	E-1	E-1	E-4	E-1	E-1	E-1	E-1	E-1	E-1	E-1	E-1
溶性アリナ-4溶液 I [重量比]	F-1	F-2	F-3	F-3	F-3	F-3	F-3	F-3	F-3	F-3	F-3	F-3	F-3	F-3	F-3
溶性アリナ-4溶液 J [重量比]	-	-	F-4	F-4	F-4	F-4	F-4	F-4	F-4	F-4	F-4	F-4	F-4	F-4	F-4
溶性アリナ-4溶液 K [重量比]	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	G-1	G-2
溶性アリナ-4溶液 L [重量比]	3	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
溶性アリナ-4溶液 M [重量比]	0.2	0.7	1.1	1.4	0.9	0.6	0.6	0.7	0.7	0.5	0.5	0.8	0.6	0.7	0.9
溶性アリナ-4溶液 N [重量比]	0.4	1.3	1.8	2.2	1.3	1.1	1.0	0.9	1.0	1.0	0.9	1.5	1.2	1.5	1.3

【表2】

【表2】

表2

	比較例				
	1	2	3	4	5
ポリビニル酸銀 A 〔重量部〕	A-1 100	A-1 100	A-1 100	A-1 100	A-1 100
活性フジ酸樹脂 B 〔重量部〕	-	-	-	B'-1 0.5	B'-1 0.5
硬化促進剤 C 〔重量部〕	C-1 0.3	C-1 0.03	C-1 0.03	C-1 0.3	C-1 0.03
耐熱安定剤 D 〔重量部〕	D-2 0.01	-	D-1 0.1	-	-
耐熱安定剤 E 〔重量部〕	E-2 0.2	-	E-1 0.2	E-2 0.2	-
耐候(光)安定剤 F 〔重量部〕	-	F-3 0.4	F-3 0.4	-	F-3 0.4
着色剤 G 〔重量部〕	-	-	-	-	-
モノマー H 〔重量部〕	H-1 2.4	H-3 3.3	H-2 3.0	H-3 7.1	H-4 8.3
活性フジ酸樹脂 H 〔μg/cm ² 〕	H-1 2.7	H-3 3.9	H-2 3.4	H-3 10.7	H-4 12.1

【0124】表より明らかなように、比較例に比べて、実施例の樹脂組成物は、成形時のモールドデボリゲットが

少なく、成形性が改善されている。また、ホルムアルデヒドの発生量も大幅に低減されている。

フロントページの続き

フターム(参考) 4F071 AA40 AA41 AE05 AE09 AF45
AH07 AH08 AH12 BA01 BB05
BC07
4J002 CB001 CC282 DA036 DE076
DE086 DE226 DE236 DE286
DH046 DJC06 DK006 EE036
EE056 EGC26 EG036 EG046
EH126 EJC26 EJ036 EJ046
EJ066 ENC66 EN076 EN106
EN116 EPC16 EQ026 ER026
ET006 ETC16 EU076 EU176
EU186 EVC66 EV076 EW066
FD036 FDG66 FD076 FE096
CH00 CC00 GL00 GN00 QQ00